

氏 名	MOHAMMAD NAGHIZADEH モハマド・ナギザデ
学位の種類	農 学 博 士
学位記番号	農 博 第 324 号
学位授与の日付	昭 和 55 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	農 学 研 究 科 農 林 經 済 学 専 攻
学位論文題目	AN APPRAISAL OF THE SIGNIFICANCE OF FARMERS COLLECTIVE ACTION AND THE ROLE OF COOPERATIVES IN AGRICULTURAL DEVELOPMENT-WITH SPECIFIC CONSIDERATION TO THE ECONOMIC DEVELOPMENT OF IRAN (農業発展における農民集団活動の重要性と協同組合の役割に関する評価—とくにイランの経済発展に関する考察) (主 査)
論文調査委員	教 授 貝 原 基 介 教 授 上 村 恵 一 教 授 三 好 正 喜

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、イラン経済発展のため、農業の開発が極めて重要であるという立場に立って、それに貢献する協同組合の意義と役割を研究したものである。

著者は、第1章緒論において、先ず本研究における農業協同組合という用語を限定し、イランの土地改革前後の農業を概説して、農業の開発にとっては、農民の自主的参加が重要であることを述べ、次いで、本研究の目的、範囲、本研究と関連すべき分野および本論文の構成に及んでいる。

第2章は、農業開発に関連した協同組合の文献を批判的に考察している。前半において、異った社会経済ならびに政治的観点から、農業部門に関連して、開発および未開発の問題を検討し、後半においては、協同組合の諸概念を分析的に考察し、農耕における農民集団活動の諸形態を整理し、本研究に適用する協同組合の定義を与え、最後に、国民経済における協同組合統合の問題に及んでいる。

第3章は、種々の見地から、農業開発に対する協同組合の貢献を検討している。先ず、経済開発に関連する組織の評価は、単に組織がとっている特殊な形態を記述するよりも、特定領域、たとえば農業部門の経済運営に対して果す貢献という点におかれるべきであることを強調している。次いで特定の組織として協同組合をとりあげ、それが経済開発にとって、最も切実な問題を解き得るか、ということに関連して、以下の諸項目——出荷販売、貯蓄と資本形成、分配と社会経済の二重性、農民離村、開発計画の地方分散化、社会経済の動態過程と農業経営、人的資源の移動——を詳細に考察している。

第4章においては、先ずイランに現存する諸種の農業組織を類型化して概説し、次いでそれらを、分析的に考察する判断の基準となるべき事項を検討し、さらにその判断基準に基づいて、望ましい組織へと導く考察をおこなっている。

第5章は、先ずイランにおける協同組合の歴史的経過を明らかにし、事例的分析をも含めて、土地改革前後の、農村地域における施設等の利用組合の展開について述べている。

第6章は、イランの土地改革後、政策的に形成された農場会社の動向について、分析的に検討している。

農場会社は、その形成および管理運営において官僚的であって、多数の離農を伴い、大型農場方式として企図された農業生産力の発展は期待できないことを指摘し、本研究において明らかにした判断基準に照して、農業開発のために好ましい農業組織ではないことを論じている。

第7章は、本論文において展開した要点を略記し、次いで結論に及んでいる。

論文審査の結果の要旨

経済の発展途上国において、幼稚、かつ低生産性の農耕状態から離脱して、農業発展に導びくことは、最近における主要な世界的課題である。したがって、多くの先進諸国の農業経済学者等によって、調査研究が進められるとともに、開発をめざした諸種の実施計画に対して、単独ないし国際的団体等を通じて、先進諸国からの資金助成や融資、その他が供与されている。

しかしながら、著者は、こうした研究が言語、慣習等の障害によって歴史的経過をふまえた現状を、十分解明しているとはいえず、諸種の助成等も、当の発展途上国における国内体制によっては、農業開発上、とくに農民にとって、必ずしも好ましい結果となっていない場合が多いことに留意し、発展途上国における農業開発にとっては、伝統的な相互扶助的活動や、施設利用組合等々、をも含めた協同組合活動が極めて重要であることに、着目している。

こうした観点から、著者はまず協同組合に関する文献を広く検討し、それらの多くが、発展途上国における農業協同組合を、古典的協同原則や、宗教および政策的関心としてとらえ、且つ経済発展の重要な手段、とみなしてはいても、ほとんどが、経済進歩に適合した農業部門の開発と、それを継続的に推進させる基本的動因であるという機能を、看過したことを重視している。

次いで農業開発の主要な担い手は、1) 個々の農民、2) 農民の集团的活動、3) 国家、の3者であるとし、農業協同組合を、1) 農民の集团的活動であること、2) 構成員による経済の自主的決定原則をもっていること、3) 農地の所有、ないし利用における共同であること、という3つの要件をもつものとして把握し、資本主義、ならびに社会主義体制下における協同組合とは、多少異ったものとして限定し、発展途上国の農業開発にとっては、この農業協同組合が基本的動因となり、しかもそれを継続させる契機であることを明らかにしている。

著者は、イランにおける農業の現状、ならびに土地改革前後の経過を詳細に考察して、自主、自発的決定原則に基づく、経済的活動組織としての農業協同組合は、イラン農業開発にとって、必要な基礎的諸条件をみたし得ることを詳細に論じている。

このように本論文は、農業開発に対する農業協同組合の、意義と役割を明らかにしたもので、イランならびに発展途上国の農業開発に貢献し、農業経済学の進歩に寄与するところが大きい。

よって、本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。